



芝居小屋の街 憧れの「エーとこ」

神戸・新開地100年



芝居小屋が並ぶ戦前の神戸・新開地の様子を伝える絵はがき。中央奥が聚楽館

「エーとこ、エーとこ、聚楽館」。神戸人は、うれいことがあると、意味不明なまま、こう叫ぶ。神戸の湊川を埋め立てて

「新開地」というまちが誕生して今年100年である。湊川の明治末の付け替え工事は、神戸港に土砂が

付け替え工事が完成したのも、子どもたちが口ずさむのは1905年11月。これだけでは近代都市神戸の建設は困難であった。交流の場として、湊川神社境内にあった芝居小屋を、旧河川敷に移転してきたのである。それでも、当初は、土手からキツネが飛び出すほどの寂しい場所であった。ところが、1913年、東京

昭和初期にはみなどの祭坂を走るコミュニティーバスの会話、防災活動、震災体験交流の修学旅行生。市民の交流、デイケア、

人と芸交流の場

往時の復活より熟成に期待

流れ、港が浅くなるのを防ぐためだけではなかった。中世から瀬戸内の流通を支配してきた港町気質を持つ兵庫津と、東側に新たに開けた神戸とは、高さ約10メートルの土手で隔てられていた。

帝国劇場を模し、内部に赤絨毯を敷き詰めた娯楽ビルが突如、完成した。秀吉が作った聚楽館を再現したといわれる聚楽館である。当時の映画館・芝居小屋が押しかけた。



森栗 茂一

切り立った断層山地、六甲山の土砂が川底にたまり、その濁流が流れ出るのを避けるためだ。この土手が、兵庫津と神戸の交流をさまたげてきた。

「ちんちん電車、花電車、輝く朝日館、水に流れる菊水館、看板でごまかす松本座、エーとこエーとこ聚楽館」とある。労働者は木戸館「悪いとこ悪いとこ」を、市民共通の憧れ、誇りを持つ場所を特定することあるD商店街。石畳が美しい。大阪市民すべてく人々がゆったりと歩く。大阪府民すべてく人々がゆったりと歩く。大阪府民すべてく人々がゆったりと歩く。

かつて、河原のような無主の土地には、仮設の市が立ち、人々は物と心、銭と芸を市で交換し、そこには虹が立ったという。新開地は、近代都市の記憶を生かした、芸と人が交流するような場に熟成しつつある。いくつものエーとこのなかで、ぼくらのエーとこ新開地が永遠に不滅で、熟成していくのを、新開地にあこがれた最後の世代として期待したい。